津田昇平教話　第十二話

令和三年一月十二日　朝の教話

世話になるすべてに礼をいう心

おはようございます。令和三年一月十二日をお迎えさせて頂きました。

今日も神様から新しく命を頂いて、目覚めさせて頂いて、何から何までお世話になりながら、一日の生活をスタートさせて頂くことができます。ほんとに勿体(もったい)ないことやなぁと、ありがたいことやなぁと思わせて頂きます。

「ありがたい」というのんは、「有(あ)ることが難(むずか)しい」ということを書いて、「有(あ)り難(がた)い」って言うんですけども、なかなかこう、日々機嫌よく過ごせたり、健康で過ごせてたりすると、どうしても、「これは『有ることが難しい』のではなくて、当たり前のことやないか」と、考えてるわけで

はなくとも、何となくそんな感じに、人間っていうのは思い違いをし始めてしまいますね。

そういう意味では、風邪(かぜ)をひいたり、まあ少し足を挫(くじ)いたり、大きなことにならん限りにおいては、少し困った状況になると、「あぁ、これは当たり前じゃなかったんやなぁ」ということを思い知らされますんで、実際ほんとは、ずっとそうだったんですけどね。なんかこう、おかげを頂き過ぎて、それが当たり前になってしまうと、ありがたいことが、あんまり「有り難い」というふうにして、実感が湧(わ)かんようになってしまう、というのはありますね。困ったところですけれども、人間にはそういう、いい加減なところがあるなぁと思います。

でも、それがいいというわけではなくって、むしろそこから、うかうかとめぐりを積むということ、無礼を知らず知らずに重ねる。「礼が無い」と漢字で書いて「無礼」になりますから、そこから、うかうかとめぐりを積んでしまうということがあるわけですね。

そう思ったら、今、社会状況一つ取っても、コロナのことがあったりとか、また、今後の世界情勢のことも含めて、いろんな不安定なことがあれば余計に、今、生活ができているということは、やっぱり当たり前のことではないなぁ。自分も、家族も、友人知人も含めて、今日も命を頂いて、過ごすことができるということは、やっぱりほんとにおかげを頂いてることやなぁということを、改めて感じさせて頂くことができます。

教祖様は、

信心する者は、山へ行って木の切り株に腰(こし)をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ。

【理Ⅱ　伝承者不明　二三】

というふうにして、仰ってますね。「信心する者は、山へ行って木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ」というふうにして、ご理解下さってます。

金光教の信心さして頂いてましたら、よく聞く教えやと思います。分かりやすいというのもありますしね。象徴的ですもんね。

私も小さい時に聞かしてもらって、「あぁ、なるほどな」って、「ふーん」と思って、「なんで?」というよりは、「あぁ、なるほど」と、何かこう思った記憶がありますね。

で、このみ教えはっていうと、まあ実はこう、誰が伝えたかよく分からない、伝承者不明とされてるんですね。「近藤藤守(こんどうふじもり)の伝え」とか、「白神新一郎(しらかみしんいちろう)の伝え」とかって、どなたか有名な方が残されたというわけじゃなくて、伝承者不明なんですけれども、でも、百何十年も経ってでも、御道(おみち)の信心を表す象徴的な教えとして、大切にされてきておりま

す。それだけ、御道の信心の大切なところを表してるんでしょうね。

で、それをものすごく広げて、大切になさったのが、四代金光様ですね。教祖様の跡(あと)を二代金光様、金光四神様(こんこうしじん)、貫行君(つらゆきのきみ)とも言いますけども、四神様が継がれ、その後、金光攝胤(せつたね)様、三代金光様。それから、四代金光様、金光鑑太郎君(かがみたろうのきみ)。四代金光様が金光様としてお受けになって、その時に、「世話になるすべてに礼をいふ(いう)こころ」ということをものすごく大切にされたんですね。四代金光様は歌人でもいらっしゃいましたので、毎日、一日十首詠(よ)んでおられたと聞いております。

その中でもやはり「礼をいう」ということは、たくさんこう、お歌の中にあるわけですけど、「世話になるすべてに礼をいふ（いう）こころ」と

いうことは、ものすごく大事なんですね。

で、それを、元々こう辿(たど)った時に、三代金光様が、教祖様のみ教えたった一か条でも結構ですから、まあそれをほんとに大事に大事にされたらそれで結構です、と。つまり、あれもこれもというよりも、たった一つのみ教えでもほんとにしっかりと貫いていけばいい、と。

これ、なんでかと言うたら、ほんとにみ教えというのはもう、千人千(せんにんせん)様(よう)、万人万(まんにんまん)様(よう)で、たくさんのご理解がありますけど、御道の信心というものを一本の木に例えたら、木がありますね。根っこがあり、で、大きな太い柱がありますね。幹がある。で、そこから、太い枝、細い枝、そして、葉っぱがついてるわけですけど、み教えというのはほんとに、一つの葉

っぱに過ぎないですよね。でも、その、一本の葉っぱであったとしても、それをどこまでも、こう、大切に大切に深めていけば、深まれば深まるほど、それは、一枚の葉っぱのところから、細い枝、太い枝、そして、木の幹、根っこまで、全部こう、通ずるということを仰ってるんですよね。

だから、その中で、その有名な三代様のご理解も頂いてこられた四代様とされて、この「世話になるすべてに礼をいふ（いう）こころ」を大切になさった。で、それが御道の信心として深く根付いてったというのがあると思います。

山へ行って、木の切り株に腰をおろす。まあ昔ですから当然ね、電車

とかもありませんので、歩くしかありません。で、山へ行って、木の切り株、木の切り株っていうのは、考えてみたら、必要なもんっていうのは、上の木ですよね。まあこれを切って何か加工しようと思ったりして、切るわけです。

で、切って倒して、必要なものは言うたら、上の部分ですよ。木の切り株っていうのは、はっきり言ったらもう、使い道がないですよね。人間が生活するうえにおいては、何の助けにもならんっちゃ、助けにもならんのんです。

いるのは上の木。まあそれをまた加工して、材木として、何かに使ったりってことがあるでしょうね。あるいは、山も放置しておりましたら、

なかなか大変ですから、里山にしていこうと思っても、間引いていくということになる。間引いていくっていっても、やっぱり不要やから、まあない方が、山の管理としてはきちんとできるから、ということで、間引くんでしょう。で、間引いても上の部分はやっぱり、使い道はあるかもしれませんけれど、切り株というのは、もうどうしようもないです、これ。何か、根も張ってますから、持って行くわけにもいかんし、かと言って、その場で何かを作るということもできない。つまり用なしなんですよね。でも、用がないし、役に立たんし…って、そういうものであったとしても、山に行って、ちょっと休憩（きゅうけい）と思って、腰をおろして休む。そして、立つ時には礼を言う心持ちになれ、というふうに仰るんですよね。

礼を言うんですから、「ありがとうございます。お世話になりました」っていうことですね。

じゃ、考えてみたら、ほんとにこう、人間がまあ言うたら捨てたような、使い道がないような、欲しいのは上の部分。あるいはもう、そもそも、この木がもう邪魔(じゃま)やな、いうので切り取った。で、もう残って動かしようもないから放っておこう、というもんでしょうね。でも、それに腰をおろして休ませて頂いた。休ませて頂いたんやったら、お世話になったわけですから、そのお世話になったということに対して、お礼を申し上げる。これが信心なんだ、ということを仰るわけです。

で、面白いのは、四代様はここをずっとこう考えられてですね、物を言う人間に対してやったら、「ありがとうございます」と、お世話になったらね。通りすがりの人に「ありがとうございます」って言いませんでしょう。梅田（うめだ）を歩いてて、通りすがりの人に「ありがとうございます」なんて、急に言うことはありませんわね。言う時っていうのは、ま、ハンカチ落として、「これ、落ちてましたよ」って声かけられたら、「あぁ、ありがとうございます」って言うでしょうね。それはあるかもしれません。

つまりそれ、お世話になったから、お礼言うんです。お世話になって、なった方に対して、「ありがとうございます」って言うんですね。お世話になってなかったら、たとえ相手が人でも、「ありがとうございます」と

は言いませんわね。お世話になったから、「ありがとうございます」。

そうすると、ものにお世話になってる、っていうことを四代金光様は考えられて、「お世話になってるのに、礼を言わないっていうのは、なんでや？」っていうことを問われるわけです。相手がしゃべる人間やから、物言う人間やから、「ありがとうございます」と言う。じゃあ、物言わんものに対しては、「ありがとうございます」と言わない。それ、なんでや？と。

そもそも、もう一度考えたら、おんなじ人やから礼を申すんじゃなくて、お世話になってるから、お礼を申す。じゃ、お礼を申してる中身というのは、お世話になってる、ということですよね。だったら、ものにだっ

てお世話になってるんやったら、一つひとつお世話になるものに対してお礼申さんとおかしいやないか。まあ、そうなんですよ、確かにね。言って頂くと。

でも、人間というのは、相手が、お世話になる相手が人やったら、しゃべる相手やったら、「ありがとうございます」やけど、でも、そうじゃなかったら、「ありがとうございます」も何にも言わずに、勝手に、好き勝手に使っとるんですよね。それは違うやないか、と。

で、その「もの」っていうのは、もうちょっと深く考えていくと、天地金乃神様（てんちかねのかみ）のお体である、このご神体（しんたい）、この天地のものを、少し加工させて頂いて、加工するんでもお世話になってね、いろんな天地のものに

お世話になって、そして、天地のあるものを加工して、で、人間にとって、使い勝手がいいものに変えさして頂いて、で、神様にお恵み頂いて、使わして頂いてる。つまりこれ、神様の体にお世話になっているわけですから、ご神体の一部ですから、だから、ものにお礼を申し上げるということは、これすなわち、神様にお礼を申し上げるということと一緒やないか、ってことを仰るわけです。これもほんとにその通りですよね。

で、それを、元を辿(たど)って、教祖様のご信心というところを考えて、「山へ行って木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ」。まあその当時、それが普通の、常識的な感覚というよりは、「へぇー、そんなことまでするんですか！」と思われたかもしれません

よね。

でもほんとに、もういらんもの、役に立たんものみたいに世間では思われてるものであったとしても、それでも、自分がお世話になったんであれば、そのものに対して、物を言うからって言うんじゃなくって、物を言おうが、物を言うまいが、お世話になったということに対して、神様に恵んで頂いた、お世話になったと思うて、相手が人であれ、ものであれ、世話になったことは、「ありがとうございます」というのんが、この天地の間に生かされて、天地のお世話になって、天地に恵んで頂いたものに囲まれて、そして、生活してる人間として、当たり前だろうということをこう仰るんですね。これは教祖様のご信心であり、四代様がと

っても大切にされたところです。

四代様はたくさんお歌を詠(よ)んでおられるんですけど、私、見せて頂いて、読まして頂くこと、まあ非常にこう、まとめて下さった先生がおられて、それを読まして頂く機会もあったんですけど、お礼を申し上げるということに対して、四代様は、大体まあ三つぐらい、大きな意味合いで、詠(うた)っておられたんですよね。

一つはですね、お礼を申し上げるということは、神様にお礼を申し上げることだ、っていうことを、やっぱりこう仰ってるんですよね。で、それを教えて下さったっていうことは、すごくありがたいことだ、と。教

祖様が教えて下さった、神様が教えて下さった、お礼を申し上げるということ。物を言う人じゃなくて、物を言わない人に対してでも、お礼を申し上げるっていうこと。

つまり、すべての、世話になるすべてのもの。ものは、漢字で言ったら人間という意味での「者」もあれば、物質という「物」もありますけれども、世話になる全てに礼を申し上げるということ。これはほんとに、教えて頂いて、ありがたい。ほんとに良かったです、ってことを大事にされてますね。それが、神様へのお礼そのものなんだ、っていうことを仰います。

ちょっと四代様のお歌を紹介しましたら、

ものいはぬ
ものにも世話になる
礼をいふこころをと教へ給へり

【四代金光様お歌】

物を言わないものにもお世話になっている。そして、そのお世話になってることに対して、この物言わぬものに礼を言う、という。その心を教祖様は教えて下さった、ってことを仰るんですね。

次は、

世話になる
すべてに礼をいふこころ
そのまま神ををろがむこころ

【同】

「を（お）ろがむ」というのは、拝むという、まあ、拝むということですけど、まあそれを非常にこう、恭（うやうや）しく言葉にすると、おろがむということですね。

「お世話になるすべてに礼をいうこころ」っていうのは、先ほども申

しました、天地金乃神様（てんちかねのかみ）のご神体（しんたい）、お体は、この天地そのものです。その、山からそら、金（きん）を取り出そうが、鉄を取り出そうが、山に行って木を取ろうが、土を掘って、それで何かを、まあ陶器（とうき）を作ろうが、みんなこれ、神様のお体の一部ですよね。だから、ものをお世話になって、お礼を申し上げると言うのは、神様にお礼を申し上げるということ。神様を拝まして頂くということ。拝礼申し上げると言うことと、おんなじなんだ、ということを仰ってます。

もう一つ、

世話になる

すべてに禮(れい)をいふこころ
神を現はし神になるこころ

【同】

これもう一つ、踏み込んで仰ってますよね。お礼を申し上げるということは、それが神様を現して、神様になっていく、生神(いきがみ)になっていく。そこまでこう踏み込んで仰っておられますね。これ、非常に面白いなぁと思いながら私なんて聞かしてもらいます。

で、これ今、神様に対してとか、教えを頂いてありがたいっていうことなんですけど、私たち、日々暮らしの中でお礼の稽古(けいこ)をしていこう、

お礼の稽古というのも、四代様がとてもよく仰ったんですけど、私も、「お礼申さしてもらったらいいね」という時には、神様のお世話になってるから、お礼を言うて当たり前ってのがまあ一つですわね。今申し上げたようなことです。

次に、もう一つあるのは、やはり、お礼を申し上げるということが、こう、難儀（なんぎ）に負けない力になる。難儀に呑（の）み込まれてしまいそうな時っていうのは、人間にはあるんですけど、心が塞（ふさ）ぎ込んだり、不安になったり、それでどうしようもなくなってしまうということが、生きてたらありますね。

でも、そこに呑み込まれない。そこを凌（しの）がして頂ける。そのために、お

礼を言う心っていうのが、大きな大きなカになるんだということ。呑み込まれて溺(おぼ)れそうなところに、一番大きなこう、浮き輪になるということですよね。

ちょっと紹介さしてもらいましたらね、

世話になる
すべてに礼をいふこころ
はなれてはならぬなげきにまけて

【同】

「なげく」ということに負けてしまって、お世話になるすべてに礼をいう心という、そこから、手放して離れてしまったらいかんよ、ということですよね。

ま、これはもう全部、四代金光様ご自身の実体験を述べていらっしゃると思ってます。感じておられるところ。まあ、お歌というのはそういうもんやと思いますけど。

せっかくなんで、なかなかね、四代様のお歌っていうのを聞く機会も皆さんないでしょうから、まあこの機会なんで、少し聞いてて下さい。

心労のとりこになるな

世話になるすべてに礼を
いふこころもて

【同】

「心労の」心が疲れることですよね。悩んでしんどくなる。「心労のとりこになるな　世話になるすべてに礼を　いふこころもて」お世話になるすべてに礼をいう心という、その心をしっかり持って、その心労のとりこにならんように。まあさっきは、嘆(なげ)きに負けんように。心労のとりこにならんように。

で、もう一つ。

世話になる
すべてに礼をいふ生き方
ゆらぐこころにやすらぎもたらす

【同】

もう一つ。

すべて世話に
なり来ての今のわがなげき

礼をいひっつしのぎゆかせ給へ

【同】

これ全部、ご自身の体験で仰ってるんですね。まあ、簡単に説明、今のお歌でも、嘆(なげ)いていらっしゃったりすることがあるんでしょうね。そこを何とか凌(しの)がして頂く。そのために、ここまでお世話になってきて、そして今の自分があり、お世話になってきて今の自分があってるその上での、今のわが嘆きだから、ここまでのことをお礼申し上げながら、ということだと思うんですけど。礼を言いつつ、そこを、今しんどいところ、苦しいところ、そこを、どうぞ凌がせて下さい、ということをお願いさ

れてるんでしょうね。

こういう、難儀にこう呑(の)み込まれない、負けない、そのために、このお礼を申し上げると言う心が、とても力になるってことを仰ってると思います。

もう一つ、三つ目ですね。これはまあ、お礼を申し上げる心っていうのは、助かり、あるいは救いの力になるっていうことをやっぱり仰りますね。和(やわ)らいでいくとか、救われていく。和賀心(わがこころ)というのは、まあそういうことなんでしょうね。「心が救われたわ」「あ、すごい助かったわぁ」とか、「ホッとしたわ」ということですよね。解放されたとか。

世話になる
すべてに礼をいふこころ
人が助かり立ちゆくこころ

【同】

世話になる
すべてに礼を言ふ心
生活に光とうるほひもたらす

【同】

と、仰ってますね。

世話になる
すべてを大切に思ふこころ
人の立行くこころといはん

【同】

これも、おんなじことですね。まあそういう意味じゃ、助かり、救いの力になっていく。そのためにお礼を申し上げていきましょう、というこ

とですね。

確かに苦しい時っていうのは、どうしても視界が狭くなってしまいます。心も固くなってしまいます。そういう時に、ここまでおかげを頂いてきた、お守り頂いてきたというところに心を向けて、お礼申し上げていくというのは、固くなったその心、小さくギューッと固くなって、小さくなった心を、ふわっとゆるめて、ほぐして、広げて下さるんですよね。

おかげは和賀心（わがこころ）、自分の心ですから、おかげを頂くために、心っていうのがまあ器を作るわけですから、じゃあ、どういう心がいいかって言ったら、ゆったりとして深い大きい心の方がいいに決まってるじゃないで

すか。

でも、なかなかそうはいかない。苦しかったり、しんどかったり、不安だったりっていうことがあると、やっぱり固くなるし、心はね、小さくなって、ギューッとなってしまいます。そうするとそれは、「その心を器に例えたら、どんな器になってますか？」って聞かれたら、どんなふうになります？

いやもう小さくなって、もうなんかいびつになって、こう穴もあいてんのやろかっていう心に、例えれるかもしれませんよね。私なんて、聞かれたらそんなふうに答えそうですね、自分のことで考えたら。

でも、そういう心になってしまいがちやからこそ、お礼を申し上げて、

そこを凌(しの)がせて下さいってことでもあるし、それだけじゃなくって、お礼を申し上げていくということ、ここまで頂いたおかげに目を向けていく。

何も、黒いものを白と言えというんじゃなくって、白いもの、おかげを頂いてありがたいものに、実際に全部囲まれてんのが、まあほんとですよね。白いものを白いものとして、きちんと見てごらん、ってことなんです。

今、黒いところは黒いところであるにしても、でも、そこばっかジーッと見とったら、だんだんだんだん、そらね、固くなりますわね。頭も痛なってきます。心も痛なってきます。でも、そしたらその心は、器として

はどんな状態って言うたら、やっぱりちいちゃくなって、固ーくなって、ちょっといびつになっちゃってるんですよ。

だからそういう時に、やっぱほぐすために、心がホッとできるように、和(やわ)らぐように、ちょっとでも喜ぶ心に近づくために、立ち止まって、振り返って、今の今、おかげ頂いて、神様、自分に対してかわいいと思って、ご慈愛(じあい)をもって、おかげを下さってる。お世話して下さってる。お恵み下さってる。これ皆、私という人間、皆さん一人一人に対する神様の深い愛情じゃないですか。

その中で今、生活さしてもらって、その中で、生きてる上でですから、痛いかゆいがあるんですけど、でもそういう時こそ、ここまでのことを

振り返って、お礼申し上げてごらん、と。凌がして頂くために、また、おかげを頂いていくためにも、お礼を申し上げていくところをきちんと見つめて、大事にして、お礼を申し上げていこうよ。そうすると、心の器というのんが、ギュッと固ーく、ちっちゃーく縮こまってたものが、また、ふわーっと広がっていく。広がっていく。深くなっていく。丸くなっていく。そしたら、おかげを頂く器ができてきますんで、お願いして、おかげを頂くということが、できるようになってきますね。

これは、ほっとってできるもんでもないんですよ、これ。ほっとってできるんやったら、あんま信心してるということとは、ちょっと違いますわね。信心さして頂くということは、お稽古（けいこ）ですから、信心はね。信心

のお稽古。わが身わが一家を練習帳にして、お稽古するんですから。

まあそう思ったら、難(なん)に負けない力、助かり、救い助けて頂くための力として、ここまで頂いたおかげを立ち止まって振り返って、お礼を申し上げていくという、そこはすごく大事なことやなぁと思います。

ま、そもそも、おかげ頂いてお世話なっとるんですから、お礼言うて当たり前というのが、まあ大前提ですけどね。礼が無いというのは、もう無礼ですから、無礼であるっていうのは、もう、人様の足でも踏んでたり蹴(け)ったりしてんのと一緒ですから、神様のお世話になってんのに、もうろくろく礼も言わずに、足踏んでご無礼して、で、「あれがない、これがない」ばーっかり言うてるんじゃ、そらあきませんわなぁ。それで

「おかげ下さい」言うても、器がボロボロやのに、何言ってんねんとしか思いませんわなぁ。

でも、人間はすぐそうなってしまいます。だから、ここまでお世話になってることを、ようお礼申さしてもらわんといかんなぁ。何事もなく、平穏（へいおん）であれば、その時なりのお礼の申し方があるし、しんどくってそんな心にならんという時もあるんですけどね。でも、そういう時はそういう時なりの、お礼の申し上げ方があるんですよ。そら絶対にありますよ。

私も学院時代にね、もう、また鬱（うつ）やら何やら来ましてね、何回目やったか忘れたけど。一回目、二回目、三回目のかな。もう、また死にたいや

何やとかってなってました。もうお礼なんて言えることにもなりませんわ。で、お礼申そうと思っててても、お礼なんてちっとも出てこないんですよ。で、口先で言うても、まあせんよりましか、と思いながらもやってましたけど。まあそれはそれで良かったと思いますけどね、でもまあ、心は全然そうはいかんかった。

で、ある時、金光様にね、五代金光様にそのことを申し上げたんですよ。もう全然あの、あ、そうそう、五代様が「世話になるすべてに礼をいう心」って仰ったけど、「そんな心になれません」言うて、私、申し上げたんですよね。そしたら、金光様は何て仰ったか言うたら、「言えるところもあるはずだから」と、こう仰ったんです。そこでハッとしましてね。

もう「お礼が言えない、そういう心になれません」って言うた時に、「言えるところもあるはずだから」と仰ったんです。

で、ハッとしましてね。うぅーん…と。で、そこで私が思ったのは、今苦しくてしんどいのはまあそうなんですけども、でも今楽になってるかいうところやったら、今でもお礼すぐパッと言えますよ。でも言えないんですから、今苦しいからね。せやけどまあ、そらちょっと置いといて、言えるところもあるはずやっていうことを考えた時に、まあ私はこう、十八歳の時にあの、苦しいところを助けて頂いて、ここまで来(こ)さしてもらったな、っていうのを、それをふと思ったんで、「あ、確かにおかげ頂いてきたな。今苦しいのはまあちょっと置いといて、でもやっぱりおか

げ頂いてきて、ここまで来さしてもらってるのは、それはやっぱり確かやなぁ」と思ったんで、「あ、はい」と。

その、お礼を申し上げるところもあるはずやからと言われて、「確かに」と、ふと、そん時思いましてね。そしたら、お礼を申し上げることができるところもあるはずだから、そこだけお礼をしっかり申し上げといたらよろしいっていうことを、仰って頂いたんですね。

で、それやったらできるなと思いまして、なかなか、ありがたい心っていうのは、パッと湧(わ)いてこないです。まあ、もう鬱でどうにもなりませんから。せやけど、確かにお世話になっておかげ頂いてきたのは事実ですから、ま、そこは、お礼は言えるんですよね。なかなか、ありがたい

というところまでちょっと結び付かん。まあ、そういう状況ですから。

それでも、言えるところだけ申し上げてたらいいっていうんやったら、あぁ、これはおかげ頂いたな、あれはおかげ頂いたな、というところがあるんで、そこを、神様に申し上げておりましたね。

そうすると結局まあ、立ち止まって、あとあとですよ、時間経って振り返ったら、あぁ、ああいうところを通らせて頂く時にやっぱり、おかげ頂いてきたところ、お礼申し上げるっていうのんは、やっぱり力があるんやな、と。もうそん時はなかなか、あんまりこう、それでスッとするわけじゃないですから、そう単純にね。そやけど、それは別として、言霊（ことだま）、言葉というものにはやっぱり力があって、神様に「こうしておかげ頂い

て、あん時おかげ頂いて、ありがとうございます」っていう、その「ありがとうございます」と神様に申し上げるその言葉には、力があるんでしょうね。

その言葉そのものに、やっぱり、神様の言葉、神語（しんご）って言うんですかね。神様の言語と言いますかね、神様から授けて頂いた言語なんでしょうね。「ありがとうございます」っていうその言葉には、その言葉自体に大きな力があると思うんですよね。

反対に考えたらね、言葉っていうので、人を傷つけることもできるじゃないですか。例えば、親が子どもに、「あんたなんて死んだらええねん」って言うたら、これどないなります？や、言葉ですからね。や、「もう腹

が立ってもう、お前なんてもう、どっか行ってまえ」とか、「もういらんわ」とか、例えば言うたとしましょう。

人間やったら、そら腹が立ってムーッとすることもあるかもしれません。でもやっぱりその言葉ということは、グサッと来ることありますよね。逆に「ありがとう、ありがとう」とか、「いい子やねぇ」とか言われたら、「あんたようやってえらいね」って褒(ほ)められたら、まあやっぱり、嬉(うれ)しくなりますわね。

言葉っていうのはやっぱり、運んでくれるんですよね。何か、思いとかを。考えたら、そん中でも、ありがとうございますっていう、その、「ありがとうございます」。これ、届ける先は神様ですから、神様に「あ

りがとうございます」って申し上げるということは、やっぱりその言葉自体に、この天地に対して、届いて、天に届いて、地に響いて、ほんで私という小天地（しょうてんち）ですよね。私の分（わ）け御霊（みたま）様、私の肉体というものにもやっぱり跳ね返って、伝わっていくもんなんやなぁ。

自分の中で、心はそういうふうな心になかなかなれんわけです。もう鬱（うつ）になってたりして、死にたいやら何やらって感覚で囚（とら）われてますし、どうにもできませんのんで。溺（おぼ）れとんですから。そん中で、もう溺れてる最中に、まあ言ったら、そんなありがたいなんて心は、まあ出ないのは分かるんですけど、とは言っても、お世話になってるというところ、お礼申せるところもあるはずだから、って仰いました。

「お礼が言えません」って言ったら、「言えるところもあるはずだから」。そうです、確かに。言えるところはありましたね、そんな時にでも、真っ暗な時にでも。で、そこを大事にしてたら、お礼申してたら、そしたらやっぱり、その言葉に、神様、そもそも力があるから、やっぱり神様に届いて、おかげにしてくれはるんやなぁというふうにして、やっぱり思いましたね。

まあそう思ったら、お世話になるすべてに礼をいう心っていうのは、ほんまに大事やなぁと思いますね。かといって、じゃあ「お礼言え、お礼言え」と言われても、なかなか難しいもんでね。言われたら余計に固くなっちゃうところも、私なんてありますけどね。

ま、せやけど、かといって、じゃあ言わんかったらええという、それも違うしね。まあ、難しいもんやね。

でも、なんでも「お礼が言えません」言うのに、無理して言わんでもええって言うのも、これも嘘(うそ)じゃないし、かといって、言いにくい言いにくい、言えない言えないからといって、じゃあ言わんでもええっていうもんでもないんですよ、これねえ。

どっちでもないですよ。どっちも大事ですね。中庸(ちゅうよう)です。中道(ちゅうどう)です。何でも、行き過ぎて偏(かたよ)ったらあきませんな。

まあ、やっぱり基本で言ったら、お世話になってることに対して、お礼を申し上げるっていうのは、やっぱり人間存在としては大事なことや

なぁと思います。

はい、今日もまた、そのおかげの中で生活をさして頂いてます。おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくわけですから、ずっとおかげの中に暮らしてますからね、お世話になってますから。お礼申し上げながら、ま、できたら、うれしく、楽しく、ありがたくって願って下さってるんで、それをお稽古(けいこ)していきたいもんですね。

はい、どうぞ今日も一日、良い一日に、お願いしておきますし、皆さんもお願いされるでしょうから、お願いしながら、また良い一日にしてって下さい。

よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　第十二話

令和三年一月十二日　朝の教話

令和四年三月五日　初版発行

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五